

人形浄瑠璃

〔主催〕文楽協会〔後援〕文化庁

# 文楽

2003.11 文楽  
BUNRAKU  
世界無形遺産  
World Intangible Heritage



### ◆昼の部

解説

近頃河原の達引  
ちかごろ かわら たてひき

四条河原の段  
しじょう がわら だん

堀川猿廻しの段  
ほりかわ さるまわ だん

義経千本桜  
よしつね せんほんざくら

道行初音旅  
みちゆき はつねの たび

### ◆夜の部

解説

伊達娘恋緋鹿子  
だてむすめこのひがのこ

火の見櫓の段  
ひ みやぐら だん

生写朝顔話  
なまうつあざなばなし

明石船別れの段  
あかしふねわか だん

宿屋の段  
やどや だん

大井川の段  
おおいがわ だん

（財）茨木市文化振興財団第85回公演

2008年 **3月14日(金)**

【昼の部】14:00開演 (13:30開場)

【夜の部】18:30開演 (18:00開場)

茨木市市民会館

**ユーアイホール・大ホール**

茨木市駅前四丁目7番50号  
JR茨木から東へ、阪急茨木市駅から西へ徒歩10分

全席指定席 3,000円/65歳以上、障害者及びその介助者・2,500円/青少年(24歳以下) 特別料金:1,000円

\*1階席のみの販売です。\*就学前のお子様のお入場はご遠慮ください。\*12月4日(火) 発売

◆チケットの取り扱い・お問い合わせ  
(財)茨木市文化振興財団072-625-3055 (茨木市市民会館1階 8:45~17:15) 12/29~1/3は休業  
\*発売初日から電話予約もお受けしますがお席はお任せいただきます。\*予約後は、1週間以内に財団窓口でご精算ください。  
\*予約チケットの郵送をご希望の場合は、<チケット料金+郵送料290円>を、郵便局備え付けの「払込取扱票」でお支払いください。  
手数料はご負担願います。払い込み確認後の発送となります。<口座>00970-7-190576/加入者名:財団法人茨木市文化振興財団  
\*窓口販売と電話予約が競合する場合は窓口販売を優先しますので予めご了承ください。

◆その他の販売所  
JA茨木市各店舗072-627-7762 (本所総務課) /フミレコード阪急茨木市駅前店072-626-3723 /朝日野村北摂販売(株)072-643-8424  
ローソンチケット0570-000-777・Lコード予約0570-084-005 (Lコード54452)  
電子チケットぴあ0570-02-9999・Pコード予約0570-02-9966 (Pコード381-163) \*チケットぴあでは、割引の取り扱いはありません。

◆主催: (財) 茨木市文化振興財団



芸術文化振興基金助成事業



# 平成二十年三月地方公演

## 配役表

三月二日～三月二十三日

### 昼の部

解説

#### 近頃河原の達引

四条河原の段  
竹本 文字久大夫  
鶴澤 清二郎

(人形役割)

横淵官左衛門 桐竹亀  
仲買勘藏 吉田和右次  
井筒屋伝兵衛 吉田勘生  
廻しの久八 吉田緑  
駕籠屋大 田田

#### 堀川猿廻しの段

前 竹本 伊達大夫  
ツレ 鶴澤 寛治  
ツレ 鶴澤 寛太郎  
切 豊竹 嶋大夫  
ツレ 竹澤 宗助  
鶴澤 清丈

(人形役割)

稽古娘おつる 桐竹紋  
与次郎の母 桐竹紋  
猿廻し与次郎 吉田玉豊  
娘おしゅん 吉田女  
井筒屋伝兵衛 吉田雀

#### 義経千本桜

道行初音株  
静御前 竹本 文字久大夫  
狐忠信 豊竹 咲甫大夫  
ツレ 鶴澤 清丈  
鶴澤 清龍

(人形役割)

静御前 吉田清三郎  
狐忠信 吉田清五郎

### 夜の部

解説

#### 伊達娘恋緋鹿子

火の見櫓の段  
豊竹 陸大夫  
ツレ 豊竹 靖大夫  
ツレ 豊竹 喜一郎  
ツレ 鶴澤 龍爾  
レ 鶴澤 寛太郎

(人形役割)

娘お七 吉田文  
下女お杉 吉田玉  
武兵衛 吉田玉  
丁稚弥作 吉田文  
木戸番大 田田  
レ 鶴澤 寛太郎

#### 生写朝顔話

明石船別れの段  
竹本 千歳大夫  
野澤 錦糸  
琴 鶴澤 清公

(人形役割)

宮城阿曾次郎後に 吉田玉女  
駒次郎左衛門 吉田和生  
秋月娘深雪後に 吉田和生  
朝顔 吉田和生

#### 宿屋の段

豊竹 咲大夫  
鶴澤 清介  
琴 鶴澤 清公

明石の船頭 吉田玉輝  
戎屋徳右衛門 吉田玉志  
岩代多喜太 吉田玉志  
下女お鍋 吉田玉志  
奴関助 吉田玉志  
大船の船頭 吉田玉志

#### 大井川の段

竹本 三輪大夫  
野澤 喜一期

近習 大船の船頭 大井川 大井川  
川越人足 大井川 大井川

望月太明蔵社中

#### 近頃河原の達引 四条河原の段・堀川猿廻しの段

貧しくとも、病身の老母や苦境にある妹を精一杯思いやる猿廻し―京都を舞台とした三巻の世話物で、天明二(一七八二)年に江戸で上演されていますが、作者も初演も確かなことはわかりません。「四条河原」と、誠実な人々の情愛が胸を打つ「堀川猿廻し」は、中之巻に当たります。

猿廻しの与次郎が、老母とともに心配しているのは、廊勤めの妹おしゅんのこと。深い仲の伝兵衛が四条河原で人を殺し、行方をくらました関係で、密かに廊から実家に戻されているのですが、伝兵衛と心中などしないかと、親子は気が気でなく、おしゅんに伝兵衛宛の絶縁状を書かせました。文字の読めない兄と目の見えない母は、その夜訪れた伝兵衛が手紙を読むのを聞いて初めて、それが遺書だと気づき、驚くばかり。けれども、愛する人を決して見捨てまいとする娘の心に打たれた母は、二人が少しでも生きながらえることを願いながら、娘を伝兵衛に託し、兄も、めでたい猿廻しで二人を送り出すのでした。

#### 義経千本桜 道行初音株

平家滅亡後、兄源頼朝に追われ吉野に身を隠した義経。その愛妾静御前が、忠臣佐藤忠信(その正体は?)に伴われ京から吉野へと旅をする、満開の桜を背景とした華麗な道行です。浄瑠璃の三大傑作のひとつ、延享四(一七四七)年に竹本座で初演された竹田出雲・三好松洛・並木千柳合作の五段の時代物で、道行は四段目に当たります。太夫・三味線の掛け合いの華やかな演奏、静が忠信に扇を投げ渡す豪快な演出等々、見る者を引きつけてやまない、悲劇とはまた違った文楽の醍醐味を味わっていただけます。

#### 伊達娘恋緋鹿子 火の見櫓の段

火災時に避難所となった寺の男に会いたいばかりに放火し、火刑に処せられた八百屋お七―井原西鶴の『好色五人女』で有名ですが、本作のお七は、切腹を目前にした恋人を救うため、いたずらに打つと厳しく罰せられた火の見櫓の半鐘を打ち鳴らし、夜間は閉ざされ通行禁止だった町の門を開かせます。菅専助ほか合作、北堀江市の側の芝居で安永二(一七七三)年に初演された八段の世話物で、六段目の終わりのこの部分だけが、しばしば上演されています。人形遣いの姿もない舞台の上で、降りしきる雪の中、お七ひとり、罪をもいとわず、恋心を胸に火の見櫓を上って行きます。

#### 生写朝顔話 明石船別れの段・宿屋の段・大井川の段

近松徳叟の遺稿となった、司馬芝叟の長話『薙』等による五段の時代物をもとに、天保三(一八三二)年、稲荷境内の芝居で初演されました。心ならずも離れ離れとなる恋人たちを描いた、「船別れ」(二段目)と最も有名な「宿屋」(大井川)(四段目)を上演いたします。宇治で偶然に出会い一目で恋に落ちた、安芸の武家の娘深雪と山口・大内家中の阿曾次郎。しかし、阿曾次郎は重大な役目のために故郷へ戻り、深雪も両親と国へ帰ることに。明石の浦で思いがけず再会したのも束の間、再び恋人と別れ別れになった深雪はやがて家を出て、鎌倉へ向かった阿曾次郎を追って流浪し、悲しみのあまり失明、阿曾次郎が書き与えた「朝顔の唱歌」を歌い聞かせて露命を繋ぐ有様でした。この姿を東海道・島田の宿で見つけたのが、山口へ戻る阿曾次郎。恋人の惨状に胸を痛めながらも、役目上名乗れぬまま出立し、大井川を渡ります。これを知った深雪は、雨の中急いで後を追ったものの、増水のため川止め。恋しい人のそばにいながら気づくことのできない身を嘆き、川に身投げしようとしてしますが、阿曾次郎の残した薬で視力が回復し、希望を取り戻すのでした。